

むご 西暦 2148

西暦 2189

2275-1/5

412P ほか 中臣島賊津連 伊香刀美

2282 2298

改行

第三十六章 千餘人もの戦死者を出した内乱
田心 臺舉・伊是理姫
合志原の宮城域は、真暗闇の底に沈み込
んでしまっていて、一瞬の明りさえも無く、
ただひっそりと、重苦しく静まり返って
いた。
そんな夜陰の只中に、声を押し殺して泣き濡
れ、いる中臣島賊津連 難升米・伊香刀美・
天兒屋命の仄な影があった。
振り払っても振り払っても留処なく溢れ
くる涙で、醫んだ目に、真赤に燃える女王の塚
の火が、ボウと滲んで、揺れていた。
宮内正殿 西北隅の簀子縁の上に、ハラハラ
と散った。(写真図版 374・375・376 第321図参照)
まるで、西北方の丘が、苦しみ悶えているかよう
うた、泣き叫んで、大勢の聲がオニオ
ニと聞え、地を這うように、おどろお
どろしく伝わっている。
不承不承という酷たうしさだろう。私達に露
程の力も無いばかりに、あの忠実な者達があ

2,275^P-2/5

紙の線を目立たなくしておいて下さい

・カラー

・左頁の上半分に

はみ出して
大きく載せて

下さい。おかげ

・左から24目の金木
が少し奇妙です。

・内宮の東側面

の写真は多いの

ですが、西側面

写真を、やっと

見つけました。

・お牛数ですが、

つなぎ目が

出来るだけ

目立たないように

お願いします。

・左側の写真を

少し上げる。↑



1429

写真図版374

内宮の西側面

部

03382-75 44

1309

『伊勢神宮』式年遷宮と祈り

石川 梵

集英社

2014年4月22日発行

68~69頁参照

632^P

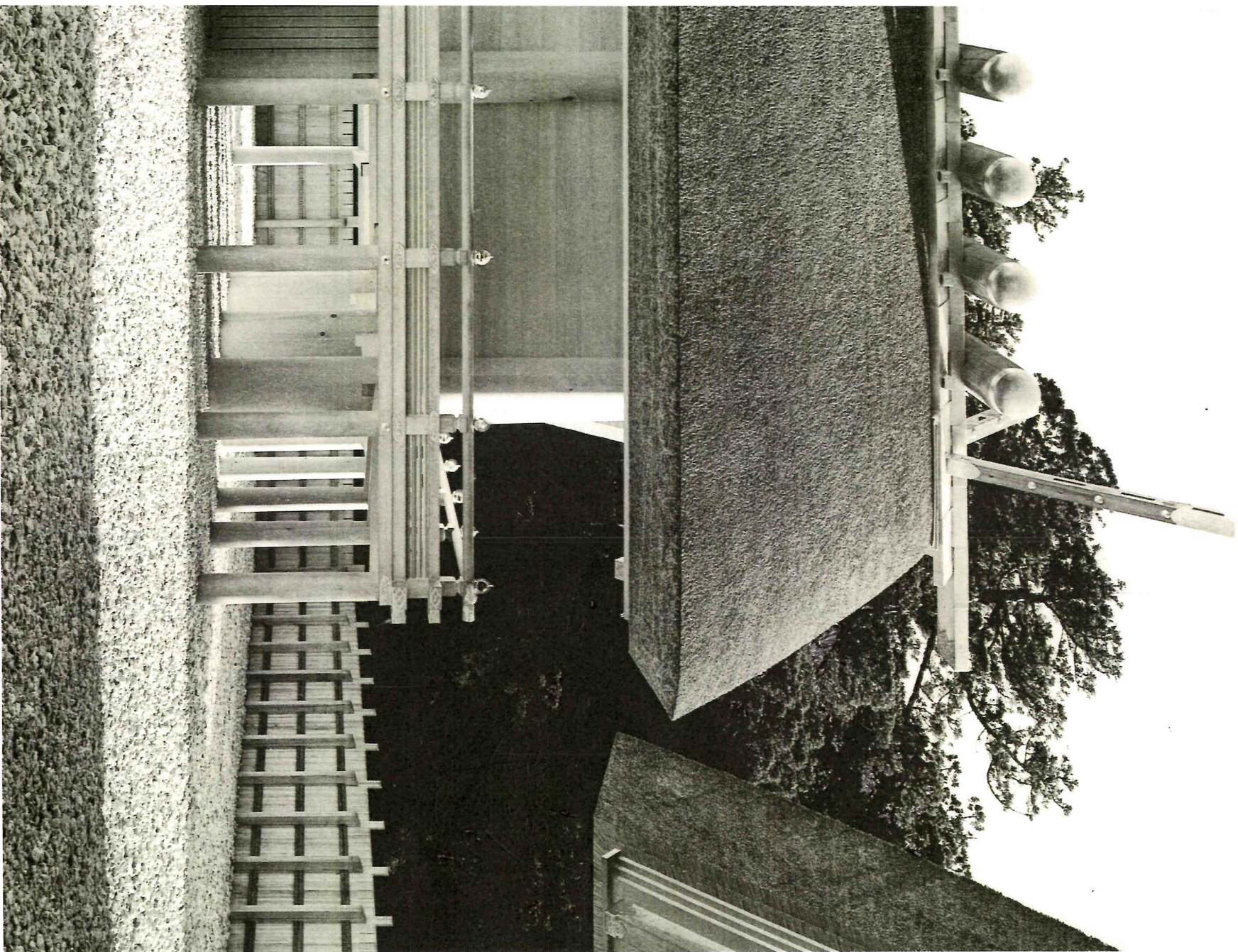
・白黒

・右頁の
上部に
秦の
載せし。

633^r

2,275^r-3/5

↑カ
↑



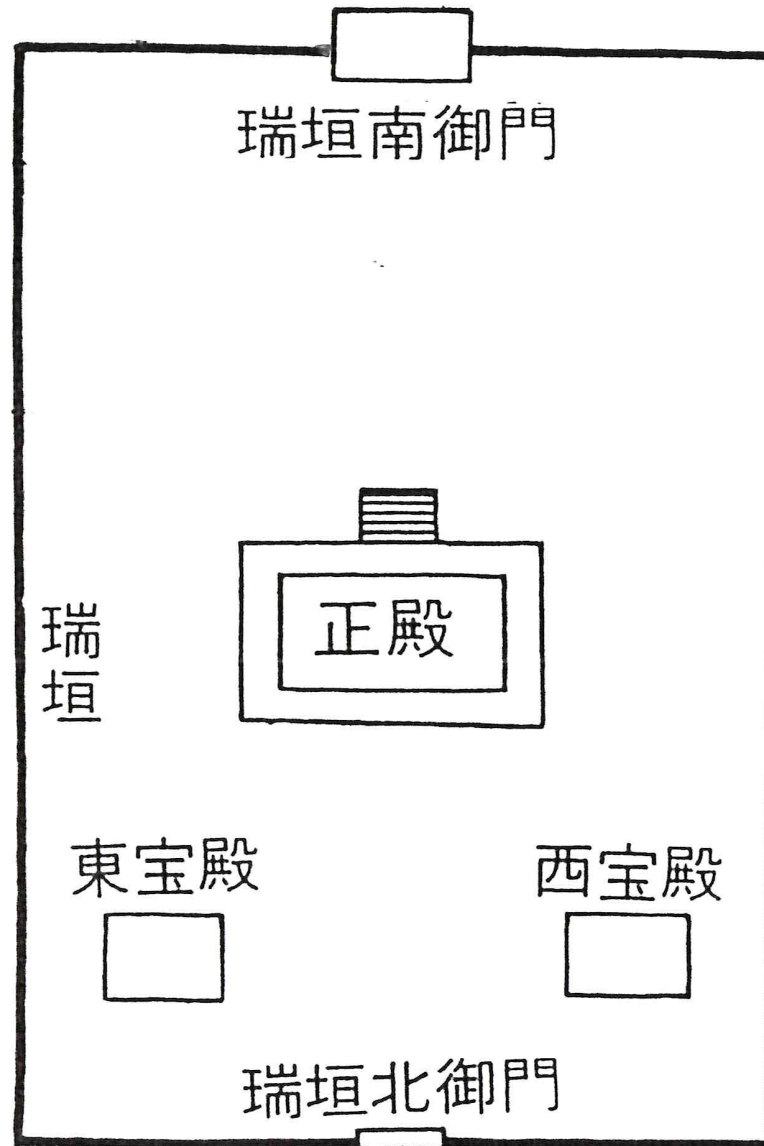
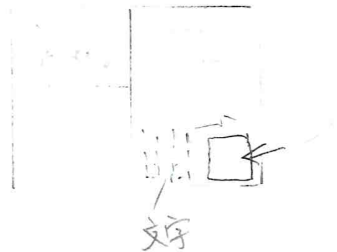
633^r

14a9 伊勢神宮 内宮正殿西北隅部 (※右の屋根は西宝殿)
13a9 渡辺義雄の眼、伊勢神宮、渡辺義雄、講談社、1994年8月25日発行、26頁、124頁
参照 10

2275P-4/5

・トレースして下さい。

・右頁の^右下に掲載下さい。



1429

第321図 北側から見た「伊勢神宮」内宮正殿周辺図

ないとうは37%

124頁

2.275P-5/5

- ・カラー
- ・左頁の上半分に
掲載下さい。



1424

1324

写真図版 376 『伊勢神宮』内宮正殿西北隅の簀子縁 (*右側は西宝殿)
『渡辺義雄の眼』伊勢神宮 渡辺義雄 講談社 1994年8月25日発行 39頁参照

「仰主見ながら」②280' 199

真赤に燃える山
山に燃える山
山に燃える山

2,276^P

山に燃える山
山に燃える山
山に燃える山

山に燃える山
山に燃える山
山に燃える山

人なにも苦いこととなつてしまつたのだ。
ああ、不慣れきわまりないで、
にも刃が突き刺さるやうに、心か痛む。私の身
中臣は、喘ぎ踉いている丘の方に向かい、
つて嘆き悲しんだ。
漆黒の闇夜の空に煙煙と見える火の山を爲
す術もなくただただ泣き腫らした目で、
と凝視して、いた中臣は、やかて立ち上がると、
「田心姫。あなた様のお母様が、あんなに
も真赤に身を焦がして、苦い人であられます
泣いておいでになるのです。姫よ。あるいは
今夜この時限この後長らく母上様にお目にか
かれないで、しやうや、です。から、どうか
しつかりと、あのお母様の御姿を見ておいて
いただきとう存じます。もしかしたら、
あなた様との別れを悲しんで、あれほどまで
に泣いておられるのかも知れません。
宮殿の隅の隅のついた欄干から、身を乗
り出すやうに、火の山を見上げていた幼い女の子は
闇の中でかすかに頷くと、――大きく目を

りな女小とめど
614 止入なく 2/1618

2.277

年端 1603

たまに 王石 2/1395 見開く 2/130 有様 2/72
総文後 53 頁 年十三 なるまで (様子) 2280 中

見開き、燃える火の山の有様を、さらに一途
に見つめつづけた。
母の苦しい泣き声が、次第次第に、激し
く切ないものとなっていくように思えて、
「女の子は、小さく叫んだ。
「お母さま」
今年十三歳になったばかりのその女の子の
目からも、涙がいつぱい溢れていった。
そして、頬を伝って流れ落ちる涙は、欄干
の下に敷き詰められている玉石に当たって飛び散った。
まだまだあどけない、年端も行かない少女
ながら、もう世の中のことが少しばかり分
りかけていて、美しく、燎燎と燃え盛
る母の塚の火が、止処なく涙を誘うのだった。
「私、これから、東国の叔父様の所へ参り
ます。お母様、どうか私から目を離さないで
ください。そして、お助け下さい」
姫は、一心に祈った。
すると不思議なことに、――まきもな
い懐かしい母の声か、田心姫の耳に聞えた。
「田心や。今は辛くとも、しっかりと生き
てゆくのですよ。あなたには、あなたのお母

同土記 457P

同土記 1845P 同土記 1849P

おいよ 音読み 電

「小町」押表に

あまてらすおほみかみ 2,278P 1/3

うけひ 誓約 紀上104P 紀上105P 末2行 OK

2275P 25行

様がついていゝるのですもの

とこころで、この物語においては、
へ次の四者は、同一人物なのであらう

と仮定してみたい。

田心姫

天照大神が、

素戔鳴尊の剣を

索い取つて、まづ最初にお生みになつた姫君

(神代紀上第六段本文)

尚、天照大神と素戔鳴尊との誓約の神話は、

倭国の女王日御子(天照大神)の名と地位

とが

田心姫

瑞津姫

市杵嶋姫

の順に引き継がれていったことを示している

めであらう。

二車彌呼の宗女

壹與

魏志倭人伝

ただ、宋本太平御覧は、臺舉と記す。

かもの原本には、田心の音を写して、臺舉

と解したい。(岩波文庫「四三七〇、五四頁注二参照」)

伊是理比咩

中臣 伊香刀美と天女

との間に生まれた長女。

同土記 466P 末2行

紀上360¹~1¹ 字アキ

改行

ニと 2,278²-2/3

同土記 458¹

• なお、後^{のち}に母^はは天^{あめ}に昇^{のぼ}ったという(「近
江国風土記逸文」へ伊香小江^{いかのこゑ}条参照、第十
二章へ降嫁^{こうか}の項において既述)
い^いく^くぶ^ぶん^ん後^{のち}年^{ねん}の^の
④ 神功皇后紀撰政六十六年(二六六)条に記^き
載^{さい}されて^ている^る日^に倭^わの女王^{じやう}王^{おう}は^は
• 察^{さつ}するところや
へ^へ第二^{だいに}代^{だい}目の神功皇后が正始九年(二四八)
ころ崩御^{ほうぎよ}された後^{のち}で第三^{だいに}代^{だい}目の神功皇后と
て立たれた宗女^{そうじよ}(長女^{ちやうじよ})
王^{おう}と書きしるした^{した} ✓
ように思^{おも}われる。
• 因^{ちな}みに、関連^{かんれん}文献^{ぶんげん}を列記^{れつき}しておく(ことに
よう。
(1) 神功皇后紀撰政六十六年(二六六)条に
六^む十六^{じゅうろく}年^{ねん}は是^{こゝ}年^{ねん}や^や晋^{しん}の武帝^{ぶてい}へ西^{せい}晋^{しん}初^{しう}代^{だい}皇^{こう}
帝^{てい}の司馬炎^{しばえん}の泰初^{たいしう}(泰始^{たいし}の誤^ごまり)の二
年^{ねん}へ二六六なりや晋^{しん}の起居^{ききよ}の注^{ちゆ}に云^いはく
武帝^{ぶてい}の泰初^{たいしう}二年^{にねん}十月^{じゅうがつ}に倭^わの女王^{じやう}王^{おう}を重^か
ねて貢^{きん}獻^{けん}せしむといふ^{いふ}

2,278^p-3/3

停アキ

(2) 晋書 武帝紀 下

「泰始二年（二六六）十一月己卯 倭人

来テ 献ニス 方物

(3) 晋書 四夷伝の倭人条に、

「泰始初テ遣シ使ヲ重テ 詔ヲ入貢ス」

とある。（「日本書紀」上）日本古典文学大系

岩波書店 三六〇一頁参照

*

令和元(2019)7.2(火)~7.2.(3回)
令和2(2020)10.23(金)~10.24(4回)

560, 7, 11 (6)

ぬんとうを (よとう 小林) ②218-23248年 年隔呼込
 年頭 1734 初頭 137 P. いちげんは (24, 最前)
 年の始め ④128 (全乱しについはせ入ていし)

$\pi \pm i2458$
 $\oplus 973^P$

$$\begin{array}{c} \frac{10}{24} \quad | \quad \frac{10}{24} \\ \frac{10}{23} \end{array}$$

話
を
進
む

以
下

③ 水
水
る

←

の様子か、
 そつと忍び込ませてあるように思
 われる。
 以下、壬申の乱の記事を参考になから
 併せ読み

話を進めてゆくことにしたい。

の様子か、
そ
と忍び込
ませ
てあ
る
よう
に思

乱の記事の冒頭部分には、二四九年年頭の「敬寒」の最中に「心」とく東国を屈指された田心姫の難涉

乱勅発と同時に東国を屈指された
 というのも、日本書紀に掲載されて
 いる壬申の

す
る
の
は
菟
野
皇
女
（
後
の
持
統
天
皇
）
で
あ
る
。

菟
野
皇
女
は、
六
七
二
年
夏
六
月、
壬
申
の

さ
て
第1表
を
見
る
と
田
心
姫
に
相
当

江ノ条参照、第十二章ノ降嬢ノ功ヲおいて、
大ニりひめ。おとう

[illegible]

之
二
リ
う
o
(
「
直
工
國
風
土
記
逸
天
一
人
伊
番
小

な
お、
後
長、
母
は天
に昇
つ
て
い
つ
て
ま
つ

[illegible]

改行

改行

2280P

暗

東国を目標して

まるで闇夜の空高くにボツカリ

悪阻に苦しむ火の山は都の西北の空高く

浮かんでいるかのように見えた。悲しく傷ましい光景

だった。宮殿の西北方のその

田心姫は火の山を仰ぎ見ながら声を

抑えて忍び泣きに泣き欄干にとりすがって

泣き崩れた。いていたが堪えきれず

へ何といいらしさに姫君の様子に胸塞がり

中臣は痛ましい姫君の様子に涙を拭いた。

闇の中でそつと顔をそむけて

ひそやかに動くものの気配があった。身を小

さし、足音さえもたてずに

てくる若者の影。それは意美志留であつた。

やがて意美志留は、二人の居る樓の下へ

つてくると、軽くそつと手を搏ち合せ

姫に向かいささやいた。

手筈がほぼ整いました。さあ、早く降り

ておいで下さい。――そして、何もかも打ち

そうはくえ
蒼白 1294

記(生) 129 P

もんえい
門衛 2206

こと
2,281

新田 尊徳
新田 0-90

やまの 1027 宮城 1057 1/2 図
紀下 567 12 門 氏 氏
元 1342 (内 西 門 東 門 郁 芳 門)
記(生) 129 P 武内 2 2 2 氏 氏 氏

つよみ 記上 87 25 P

捨てて月読の叔父君のもとへお逃げ下さいま
せ。妹・田心姫(伊是理姫)は、数ヶ月後の天石
窟の儀式において、三代目の天照大神を名告
ることとなっていた。そこで意美志留は、
わは当然ながら臣下としての礼をもつて妹
に接するのだった。
意美志留は二人の前を歩いて先導し、宮
城東壁南端の門、清明門(後の郁芳門)へ
と急いだ。第4回「広辞苑」(大内裏)の図(参照)
宮城十二門の全ては、かねてから素戔嗚尊
の命令によって、厳重に固められていた。
その物物しい警戒網を掻き潜り、田心姫が
脱出することなど不可能に思えたのだ。たが
し、か、天は田心姫を見放さなかった。
武内宿禰の説諭があつたからなのであろう。
何とか辛うじて、清明門の門衛・的氏(武
内宿禰の子孫)を抱き込み得た。出来た。(孝
元記参照)
その話を聞いた当初、男王素戔嗚尊の
青明門を守る的氏は、男王素戔嗚尊の
凄じばかりの怒りを思い、顔面蒼白となつ
て身震いした。あんなにまでも慈み深かつた女
とは、いえ、た。

王日御子を慕う気持は強かった。
つことにとうとう折れて同意した。的代は己
の身を捨てて覚悟で通用門の扉を開けたのだった。
宿禰を置いて、田心姫等は外郭城の東南の隅
を目標とした。
追手がいつ後方に見えるかと気が気でなく、
振り返り振り返り急いだ。
一かし、碁盤の目
のような都の大路・小路に警護の兵の姿はな
く、美しい悪阻の火の山を仰ぎ見ようとする
者もいなかった。
都中がひっそりと静まり
返って、ただ真暗闇があたりを覆って、い
るばかりだった。
す城柵が現われ、立ち塞がった。
この城柵の柱の影に忍び寄った者達は、夜
陰にまぎれ、密かに乗り越えようとしていた。
さつと縄が投げ上げられ、身軽な男がスル
スルと城柵の上へとよじ登っていった。

あいはやえ 足早 35 紀下387 1750 上坂 登坂 2299 2283 P

紀下 386 県大養連大伴 縣大養連大伴 紀下387 23

心姫側近の女官（十人あまり）
か、り、そ、小に女孺（後宮に奉仕する女官）
那志登美、およびおもだつた朝臣等二十人
い、で、足早に歩いていった。
な、お、最初からつき従った者は、
一行は、阿蘇へと続く上り坂を、必死の思
て、田心姫の前で止まった。
さあ、姫君。この輿にお乗りになつて下
私達は、追手の追隨を阻止が、確がめ
う、人な時、大伴の乗った輿が追いかけてき
出、発した。急なことだつたので、乗物の用意
が、間に合わず、皆徒歩であつた。
目、を、こ、う、し、て、み、つ、め、た。
田心姫は、東の方角遙か彼方の闇の中を
か、し、ぐ、ず、ぐ、ず、と、は、し、て、お、水、ず、す、ぐ、に
が、間、に、合、わ、ず、皆、徒、歩、で、あ、つ、た。
を、越、え、外、郭、城、外、に、降、り、立、つ、た。
こ、う、し、て、よ、う、や、く、こ、の、小、さ、な、一、群、は、東、国
へ、の、逃、亡、の、端、緒、の、難、関、を、突、破、し、た。
田心姫は、抱えられようたして、牆壁の上
を、越、え、外、郭、城、外、に、降、り、立、つ、た。
こ、う、し、て、よ、う、や、く、こ、の、小、さ、な、一、群、は、東、国
へ、の、逃、亡、の、端、緒、の、難、関、を、突、破、し、た。
田心姫は、抱えられようたして、牆壁の上

別の男に

560, 7.15 (t)

た

✱

うにいて、
から、東へ、東国へと進んでい

その日は、夜を徹して歩いた。雨がまた降
り始めて激しさを増してゆき、もはやあ
の火の山は振り返って、もう見えなくなっ
てしまった。
阿蘇の外輪山へと続く上り坂
は、一なく続く坂道を登ってゆく一行は、
難波の極みにあった。処々に広がる永溜りや足をとる小
川になりながら、歩きに歩いた。

早く、早く、――まさに前へ
気があせつた。無我夢中
つんのめるよ

《ぬかるみ》に

Handwritten: Hmax 83 元 輕妙 681 P

残虐 1172
痛ましい 119P
傷ましい
なげく 1655P

痛ましい 119P
重なる 1404P

2,286P-1/2

みうき 2104P
自動

うろてえ
後手 186

いに口ぎたなく罵りあう声が入り乱れた。
だが、どんなに反抗しようとも、後手に勝
られ、股を刺されて傷ついていてる者達に、
目など無かった。
兵達は、自らも血糊を浴びて真赤になりな
から、二人あるいは三人がかりで、
暴れる哀れな者達を穴の方へと引きずってや
き、穴の中へ無理矢理押し込んで立たせると
そのまわりに土を落とし入れた。
こうして、身重の姿の陵上に、土に埋ま
た人々の幾重もの列が出来上がっていった。
人々は腹部あたりまで土の中に埋めら
れ、もはや手も足も出ない状態となっ
きもならず、ただ泣き叫んだ。た者達は、
それには、悪阻の苦しみを表わしてゐるとは
いえ、口哀れとしかいいようのない、絶句
するばかりの酷たらしい有様だった。
天も、あまりにも残虐なこの所業を嘆き、
生けながらに陵の域に埋め立てられた者
らを哀れんでゐるのであらう。雨雲を低く垂

13
1947年2月14日

うすめい 189 ぐちもと 633

2.286-2/2

こ 凍える 784 兵卒 1987

痛々しい 117 涙の雨 1671 ②284 (涙が雨の如に降ること)

水龍めく悲みの涙を流した。
その涙の雨は、痛々しくも泣き呻
人々の上に降り注いだ。
＊
雨脚が繁く烈くなつていった。冷い雨
は、素戔鳴命の兵卒達をも凍えさせた。
「ようーそれまでだ。引き上げるぞ」
突然、悪阻の儀式が終了した。
納得顔の友面持ちの素戔鳴命は、口許に
微かな薄笑いをえ見せて宝輿(天子の乗物)
に乗り込むと、長蛇の列の兵等を従え
丘の上の無数の火は、雨に打たれて次第に
勢いを弱め、――もうもうと湧き起る煙り

だんをと 暖を取る 1406
 金堀城 1883
 金堀城 1966
 2,287
 上生村 2150
 城(183)

中の島 374-147
 能本 地名
 日本 地名 大系(44) - 245
 西合志村
 寒雨 483
 冬 雨

を棚引かせながら、一つ、また一つと消えてゆく。
 真夜中の身を切るような寒さが、宮城の方へ向かっていれる素戔鳴尊の一行を襲った。
 寒雨はいよいよ激しく降り、きり、さらに横なぐりの烈風が吹き荒れた。
 その妻は、雨風は、輿をたたき、輿早ちの足を阻んだ。
 輿の後方につき従う者達も、泥深い泥濘に足をとられながらの行進を余儀なくされ、もたもたと、ようやくのことで歩いていった。
 「えい。はい。まい。雨だ。」
 男王素戔鳴尊は、不機嫌そうに舌打ちした。その髭面にはぐいまた、あの傲岸な表情が戻った。
 「止むを得ぬ。今日は、こころを宿所といよ」
 うぞ。
 避難して暖を取り、その城で一夜を過ごした。田心姫は、一行は、金堀城(今の地名、日城)へ。
 田心姫は、暖を取り、その城で一夜を過ごした。

＊

・泥濘(ぬかるみ) 2.85 13行
 ・泥濘る(ぬかる)

すゝ 1189 P

素多鳴尊は、連水の者達を相手に、その金堀
 域で飲楽の時を過した。
 「各百餘歩の塚の悪阻は、さすがに凄いの
 だな」
 素多鳴尊らは、耳に鳴り響いてくる悪阻の
 苦みの声を聞きながら、―――時を忘れ
 遊びほうけた。
 そして、ようやく全員が、
 内へ帰ってきた時、
 かけて、
 「なに！ 阿姉の娘が居なくなつた」と
 素多鳴尊は、激怒し、地団駄を踏んで悔し
 かった。
 急遽命令を発し、十二の通門を守備して
 る氏族の族長等を庭中に集めた素多鳴尊は
 掴みかからんばかりの剣幕で、目を斜に、詰
 るように言った。
 「役立たずめ。お前達は任務を忘れて居眠
 でもしてあったのか。―――いや違う。お前

ニキミミ
小刻 270 2281P

2.288P-2/2

ハツカヒゲ 紀上96P 逆立つ869P
1187P 538P
改行

等^らのうちの誰^{だれ}かか、あの小娘^{こむすめ}を逃^{にが}したのだな。
と。いつた^{!!}。ふむ、しらばつく水^{みづ}ても無^む駄^だな。
ことよ。きつと見^みつけ出^だしてやろうじやない
か。どういう目^めに会^あうか、分^わつておろうな
素^す多^た鳴^{なり}傘^{かさ}の懐^{かい}疑^ぎに満^みちた眼^{まなこ}差^さが、並^{なら}び立^たつ
者^{もの}たち一人一人に注^{そそ}がれてハ握^{やつか}鬚^{ひげ}鼻^びは怒^{いか}りに教^{おし}
は力^{ちから}ッと見^み開^{ひら}かれ、
揺^ゆれ動^{うご}いて世^よにも恐^{おそ}ろしい形^{かたち}相^{さう}だつた。
疎^すみ上^{あが}って硬^{こう}直^{ちよく}してゐる者^{もの}達の目^めの奥^{おく}を覗^{のぞ}
き込^こんだり、抜^ぬき放^{はな}つた太^た刀^{たち}の切^き先^{さき}で頸^{あご}をつ
ついたりしながら、素^す多^た鳴^{なり}傘^{かさ}が、次第^{しだい}に近^{ちか}づ
いてくる。
的^{てき}の身体^{からだ}は、小刻^{こきぎみ}に震^{ふる}えた。
「おい、お前^{まえ}。——お前^{まえ}だな、跳^とかいて
や^やたのはし
その言^{こと}葉^はが終^{おわ}ちないうちに、門^{もん}衛^{えい}的^{てき}代^{だい}の首^{くび}
は、血^ちを吹^ふき、地^ちに落^{おち}ちていた。
素^す多^た鳴^{なり}傘^{かさ}の配^{はい}下^かの部^ぶ将^{しょう}達^だや、通^{つう}用^{よう}門^{もん}の長^{ちやう}等^ら
は、顔^{かほ}面^{めん}蒼^{そう}白^{はく}となり、金^{かね}縛^{ばく}りにでもさ水^{みづ}ているか
のよう^{よう}に立^たち疎^すんだ。
「おい、お前^{まえ}達^だ。何^い時^{とき}迄^{まで}ぬうと突^つつ立^たつておる

47.6.8(日) 560.7.20(日) 1788 1605 2.289P

武内宿禰 由2040-3/3

ひと 3 1873 捉ま 小林 431P

の。早く行け。早く行つて、あいつ等を引ひ
 つ捕えて連れて来い。捉まえて来た者には褒
 美を取らすぞ。早う行けし
 素多鳴尊にとつて、田心姫はどうにも腹に
 据えかねる我慢ならな存在だつた。
 へ是非にも死んでもらつて、あの陵から死
 産してもらひなけいばならな
 と思ひつた。
 ところあ、何故ぐずぐずしてあるのだ。早
 く行けと云うてあるのが聞えんのか。行け
 部将達や四衛達は、耳を劈かんばかりのそ
 の怒声に恐れをなし、弾かれたように飛び散
 った。
 *

やるせない 嘆息 元1413P
なげいてたかいきをつくこと
心のやりこみかた

2.290P-1/2 (ニと)

鳥肌が立つ 元1629P センリツ 戦慄 恐ろしい感じがすること

部将や門衛らは、それぞ小部下達を引き従
え、あるいは北へ、あるいは東へと、思い思
いの道をとって急いだ。道端に点在する民家
内へずかずか入り込んで、隠れひそんでい
や、ないかと探し歩いていった。
捜索している者達にとって、男王素多鳴尊は底
知れず不気味で、恐ろしい存在であった。
へ怒りを買った時の残忍なまでの仕打ち
そのことを考えただけで、鳥肌が立ち、
ぞくぞくするほどの戦慄を覚えるのでした。
か一方、探索者達の脳裏の片隅には付き纏
って離れない迷いもあつた。
「水にーても、あまりにーおいたわーい
「そうよ。愛くるしい田心姫を、探し出し
て、鷲掴みにし、素多鳴尊の前へ引きさらってや
かなければならぬとは、心が痛むし
幼い田心姫を引つ捕えて来いという素多鳴
尊の最命には、流石に猛猛しい剛気の者達も
ぐっと胸にこたえた。
「何とも不慣れなところよ
「猛者共は、板ばさみの境地で、嘆息するの
やるせない

IF

$$2,290^P - \frac{3}{2}$$

7744 元 1555P
伝令 命令 伝達 人

ほか、 π 2049^p π 1258^p
 吸螺 π 2049^p π 1258^p
 は甚だしい。

だつた。
とはいえ、命に背くわけにもゆかず、手わけ
して探し続けた。
そんなとき、合図の太鼓の音が近づいてきた。
~~先~~^{慌しくも}
「田心姫の一行は、東へ向かっている。」
急いで追跡せよ！
と、いう素戔鳴尊の命令が伝えられた。
こうして、追撃者等は、いまは大軍をなし、
東へ東へと進んでいった。

十六夜 元105P 月いぬ 17日 由2294P 13分 幼氣 2300P 4816P 気坂 元561P 難波 元1680P 雨上 元63P 父 元1121P
 満月の夜に 2262P 月 2388P 下 388P 中 4817P 2.291P 394P 284P 1163P 雨かよんだ道後 83739P 前の文章は 2284P

は暗くて進めないので、村の家の垣根をこわ
 十六夜の月もまだ出ず、陰しく切り立つ峡谷
 東に聳える阿蘇の外輪山の陰になつていて
 こうして、早くも夜となつた。
 太陽は、西流する白川の溪谷の底から見上げる
 気忙しいばかりに慌しく沈んでゆく
 一か、まだそんなに遠くへ来てもいない
 は、まさに至難のことであった。
 行けども登り坂だけが続く山道を駆け抜けてゆく
 引き連れた追わね者達にとつて、行けども
 年端のゆかない
 幼た田心姫ばかりでなく、女孺十餘人を
 い苛烈極まりない行軍が、さらに続いた。
 泥濘を避けながら登つてゆかなければならな
 中臣は、奥の内なる人へ言つた。
 う暫くの間、御辛抱下さい
 今のうちに出来るだけ遠くへ逃げなければな
 らないのです。お疲れでしうか、どうか
 追手の姿は、未だ見えません。しかし、
 廣さ十餘丈の黒雲

し、その水を燭とした。
か、いながらやかて、東の方、外輪山の上に月
が現われ、月あかりの中を迷った。
■真夜中ごろ、田心姫の一行は、阿蘇盆地へ
の入口にあたる立野へたどり着いたの
ではなからうか。

＊

と、こゝで阿蘇盆地は、阿蘇の五岳の南側
の谷「南郷谷」と、五岳の北側の谷「阿蘇谷」
とからなっている。
■ういて、阿蘇五岳の南側の谷「南郷谷」
を東から西へ流れる川は、黒川と呼ばれて
五岳の北側の谷「阿蘇谷」を東から
西へ流れる川は、黒川と呼ばれて
■田心姫と黒川（本流）は、立野の
東一帯ばかりのところで合流し、阿蘇外輪山
西壁の切欠部を通り、西方の有明海へと流下する。

④4819^P
紀下388^P

777^小 横 皇 526^P 675^P ④4819^P

2,292^P- $\frac{3}{2}$

④4820^P

田心姫 および中臣をはじめとする一行は、
横河にさしかかった。(天武紀元年六月二十
四日条参照)
なるほど詳らかでないが、
へ阿蘇谷を流れる黒川にあり、
河川と記述しているのであらう。
と仮定してみたい。
なお、横河は皇河の意でもあろうか。横
も皇も「クワウ」と訓ずる。
とあるあれ、この物語では、
へ一行は「黒川」にさしかかった
と考えたい。「白川の支流である」
この時、夜空を見上げると黒雲が
広さ十余丈ほどで天に経っていた。(天
武紀元年六月二十四日条参照)
恐らく、白川と黒川の合流点あた
りから空を仰ぎ見たとき、
へ阿蘇の中岳からもくと立ち昇る黒煙
か、天空の東の端から西の端へと、天を二分
するよう経っていたのであらう。
と推察される。
しかしそれによっても、黒雲が東から西の方

H10.10.4

→ H4.2.14(陰)紀下388

⑤ 大蛇(大蛇)

陰陽道(陰陽道)

726 1364 1030 4820 3739

2293

1030

1189

下道



紀下388 元年9月 経度(たて)にわたる

へ口(経度)へ太陽の進路と同方向に靡いて
おり、奇異な思いを抱かされた。おかなかつ
た。天武紀元年六月二十四日条。成務紀五年
九月条。万巻一五ニ参照。
参考迄に述べると、
へ聖徳太子によって造られたという南北に
走り下つ道が、後代、天文・地理等の基準と
されて、日の緯度(緯度)と呼ばれるように
なり、一方、日の緯度と直交し、香久山を
通る東西方向の線が、日の経度(経度)と
呼ばれるようになった。経度(経度)と
と解される。第十四章へ曰、周礼の理想
都市の項において既述、西から東へ向かつて風
また、太陽暦でいえば、冬だといふこと、
う、たわけか、神山(阿蘇山)の煙は棚引い
て、東方にはなく、西方・都の方へと流水
て、いのちのたつた。承る。
神の託宣を請い、ことを任務として、審神
者・中臣は、異しく思ひ、燭を擧げて親ら
吉凶を占う陰陽道の用具をとると、占つ
てこつと言つた。

大いゴク

どうほうこう

なんぼく

山口 ④4823^P

大山 紀下388^P

2.294

242

夜を徹して 1529^P

④4821^P 同文

242 ④2292^P 1/214^P
紀下388^P

到った。

次 3行
やまぐち

谷の最も奥深い処に相当すると思ふ。山口の登り口に
断崖があらた。伊賀国阿拝郡拓殖郷阿蘇山
絶壁(11)高い千もの山々の連なる峯の東の
立ち開くかのようになり立つ屏風のような
らく行軍を中止して食事した。目の前には、
會明に、荊棘野(所在不詳)へ着き、
大山越え

十首の
おほやま

紀下388

米

紀元年六月二十四日条参照)

天下が二つに分れようとしてゐる。す。けれども最後には、田心姫様が天下を得る。うしろのこの夜、伊賀の中山に相当する所、坊中あたりに到ったとき、口當國(阿蘇國)の意味であろう。の郡司等が数百の軍勢を引き連れてやってきた。行軍は夜中を徹して、つづいた。(天武)

八上記 55P 127P
注記参照

山の登り 12
八上記 55P

山口 1039P
山口 1039P

2,295P

1476P

392P
4行

参考
2293P
5行

因みに述べると、「常陸國風

土記」行方郡条や、「出雲國風土記」島根郡

朝酌の郷条に、「山口」(山の入口の意)の

記載がある。

この当時の人々は、山の登り口を「山

口」と称していたようである。「風土記」日

本古典文学大系、岩波書店、五五頁注一八、

一二六頁注七参照)

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

「山」(外輪山)を越えさえすれば、月読尊が

(等ら)

来る者ものを加え、田た心こ姫ひめの一行いっこうは可成かなりの大軍たいぐん

となつており、大岩おおいわから大岩おおいわへとつ

づく細ほそい山道やまみちを登のぼる人々の列れつは、長ながく、長ながく

折おれ曲まがり折おれ曲まがり、車くるまからなり、少すこづつ、

少すこづつ、上うへの方ほうへと移動いどうしていった。

田た心こ姫ひめの輿こしは、その列れつの最先端さいせんたんにあつて、

右みぎへ左ひだりへと喘あえぎ喘あえぎ、高度こうどを上げ、つた。

そ、心こころ配はいでならないといつた様子ようすであ

れ、水みづに駕籠かご昇のぼ達だつに指示ししなから先導せんどうしてゐる

中臣なかつみの姿すがたが、姫ひめの輿こしのすぐ間ま近ぢかにあつた。

一歩いっぽ一歩いっぽ、岩いわを踏ふみ、め登のぼつ、ゆきながら

望のぞむ西方せいほう阿蘇あその中岳なかつだけからは、黒雲くろぐも(黒煙くろけん)が

もくもくと湧わき出でし、盛人さかに天てんを指さして立たち

昇のぼつていた。

もう、かなりの高たかさまで登のぼつてきたが、

か、まだまだ頂上ちやうじやうは随分上おおいづの方ほうにあつた。

と、人ひとなとき、阿蘇谷あそだにの遙はるか彼方かなた、西ほうの方ほう

角かくをいつと凝視ぎんしする中臣なかつみの目めに、ふつと

何なにやら動うごくものの気配けはいが映うつつた。

「あッ」

好こうう映うつる目めに映うつる

うちもの 197
打物 刀、槍の類

たな 1378
立ち並ぶ なる

まっさ 2083
真青

土んけい 度 916
山径 山のこみち

2297

目^めをこすり、手^てを翳^{かざ}して見^みつめる中臣^{なかつみ}の眉^み間^まに、い^い知^しれない不安^{ふあん}の色^{いろ}が漂^{ただよ}った。
■それはどうやら、素戔鳴尊^{すさのみのみこと}の配下^{はいが}の者達^{ものたち}の
一団^{いちだん}のようであつた。大勢^{おおいせい}の男達^{おとこたち}が、打物^{うちもの}を
手^てに手に、こ^こちらを指^さしてや^やつて来^くるのだ

た。
「追手^{おって}だ」
誰^{だれ}かが叫^{さけ}んだ。
■崖壁^{がいはし}に立^たち並^{なら}んで、
体^{からだ}は強張^{こわば}り、女^めたちの顔^{かお}は真青^{まっさお}になつて引^ひき
締^ひつた。
切^きり立^たち登^{のぼ}る峻壁^{しゅんぺき}は高^{たか}く険^けしく、外輪山^{がいりんざん}

の頂上^{ちやうじやう}ま^まではか^かなり道程^{みちのり}があつた。逃^にげ隠^{かく}
れ^れようにも^も全^{ぜん}く不^ふ可^か能^なな^な剥^はき出^だ一の山肌^{やまはだ}。屹然^{きつぜん}とし
果^はてし無^ない嶮^{けん}嶮^{けん}な山径^{さんけい}。
急^{いそ}げ

急迫^{きゅうはく}してく^く追手^{おって}から遁^{のが}れる為^{ため}に、男^{おとこ}達^{たち}も
女^め達^{たち}も、皆^{みな}、力^{ちから}の限^{かぎ}り必死^{ひっし}になつて登^{のぼ}つた。
■足元^{あしもと}から、
に落^おちてい^いつた。
■ゴロゴロと

「早く、早く、早く登^{のぼ}るのだ」
「如何^{いかん}せん」
「気があせるもの、足^{あし}か思^{おも}ひ通^{とお}りにならない

底 ②291/15
谷 ③300/19
「眼下」④2300 49

また 2015

に の へ
返り 上げる へ 1689
殺 壁 小林 337

全て

2,298

「とこが」
⑤2306

と

阿蘇谷の平地を、まっ—ぐらに押—寄せて
来る素戔鳴命の一寸は、もう真下近くにまで
もやつてきていた。
田心姫の手輿を担ぎ上げる男達の額には脂
汗が流れ、その目は血走った。
いよいよ素戔鳴命の兵達は、絶壁に取り付
き、這い上るようになって猛然と登り始めた。
なになにせ身軽な兵士たちばかりである。見る
まに下から迫ってきて、両者間の距離は、刻
一刻毎に、急速に縮まっていった。
「ああ、もうこれまでかし
田心姫を擁して逃げ登ってきた者達の全て
が、この巖壁の上での一戦を覚悟した。
と、その時、田心姫の手輿を担いでい
た男が、いきなりその腰輿を地に降して、こ
う言った。
「姫君。恐れ多いことながら、この私めの
背中におつかまりいたさきとう存しますし
皆は、目を見張って驚いた。
「か、その意味するところは、容易に納
得し得るものであった。

底の

「とこが」
手輿に同じ

直る。

吾が君 相手と親しく呼ぶ
に 130 語

665 0

めい17 2303°17'

くなん 636°

2,300°

下り坂 629°

2298°

1.8m x 1000
= 1.800 m H₂SO₄
1.8m x 1000
= 1.800 m H₂SO₄

千尋の谷底から這這の体で辛うじて攀
上った者達は感激と疲労とでその場
にへたり込みたい程であった。
横に大きく広がって下道なき道をえい
と登って来る素戔鳴尊の軍兵等の姿が見えた
「さあ、いまは寸時と雖もぐっくりしては
おかせぬ。姫どうぞ御輿にお乗り下され。
これからさきは、もう、下り坂ばかりでござ
います。中臣は、容に怯を見せまいとつとめている
幼気な田心姫の手をとると、あたかも抱える
かのようにして輦輿の内へ請い入れた。
そこで中臣は、生死を分かち合おうとこ
こまでやってきた者達に向い、こう言った。
「皆の者も疲れておようか、出発する
ようぞし。」
大山(つまり阿蘇の外輪山)を苦難の末に
越え得た田心姫等の一行は、こんどは
たまたま広大な外輪山の東の斜面を、東方
へ下っていった。

あはれ 足下、足元 足許 } 36' ひざが笑う 560.8.96 2,301' P
 ひざ 膝 1861' はせつ 白雪 1775' かし 傾く 404' かもむて なか や え 紀 140' 遠か 1828' 角を望む 2296'

阿の襲の高千穂峯（高い千もの山々の連
 らなる峯）の山道を下りながら、
 を眺め遣ると、秀麗な腰をいた二上の穂触峯
 （今の九重の岳）が高く聳えていた。
 白雪の冠を戴く雄大なその穂日の山（久住
 の山）は、低く傾いて輝く太陽の光を浴び下
 神神といばかりであった。
 だか、田心姫達はいま、その美しい
 穂触峯の姿に見とれてゐる。余裕などなかつ
 た。徒歩きの者達は、
 膝がククとなるのを必死でこらえ、
 滑ったり転んだりしないように足元が
 りを見つめ、一目散に、駆けおりるように下
 った。
 足も折れるかと思ふばかりに、急に急い
 で、遠くへ逃げ延びて行くのだった。

*